

特集 ～麗しの大輪が花ひらく～ 信州中野のシャクヤク



「立てば芍薬、座れば牡丹
歩く姿は百合の花」

艶やかな花姿と甘く優しい香りが特徴のシャクヤクは、古くから美人の代名詞として親しまれてきました。

春から初夏にかけて、かわいらしい丸いつぼみがふくらみ、華麗で大輪の花を咲かせてくれます。

生産量日本一を誇る中野市の
シャクヤク栽培の歴史

長野県は、シャクヤクの生産量が全国第1位。そして県内総生産量の約6割は、ここ中野市で生産されています。

昭和40年代、水田転作によって風土に適したものがなく、延徳・中野・日野地区を中心に、本市のシャクヤク栽培が本格的に始まりました。

昭和47年には、「洋シャク」(花びらが多い海外の品種)の「サラ・ベルナル」の株をオランダから導入し、これをきっかけに生産が急増していきました。

平成27年には147人の生産者が、180万本を出荷し、日本一の生産量を誇っています。作付面積は東京ドーム約5個分で、ハウス栽培から露地栽培までの長期出荷ができる国内最大のシャクヤク産地です。



▲春先に芽を出したシャクヤク。冬になると地上部の茎葉が枯れ、根の状態です。多年草に分類される。

中野市から日本全国へ
そして海を渡るシャクヤク

本市のシャクヤクは、東京、大阪、京都、名古屋の花き市場を通し、日本全国へ届けられています。

また、近年は海外輸出も増加しており、ニューヨーク、香港、台湾、ドバイなど世界に向けても出荷しています。

「必ず咲く」シャクヤクを

先人たちが長年の経験で培った知識をみんなで共有し、お客さんの手元に届いたときに必ず咲く高品質のシャクヤクを目指して栽培しています。



JA 中野市
シャクヤク部会長
小林 雅彦 さん

シャクヤクの品種紹介

シャクヤクはボタン属に含まれ、中国では紀元前から栽培されてきました。多くの品種が出来てきたのは、中国では宋の時代（10世紀後半ごろ）、日本では江戸時代からで、花の形は中国では八重咲きが、日本では一重咲きが当時は好まれていたようです。
現在、中野市では、ピンク、赤、白などの花色を中心に40種類ほどの品種が栽培されています。今回はその中から代表的なものをいくつかご紹介します。



富士

洗練された印象の翁咲きの品種で、咲き進むほどにボリュームになります。

花瓶に入れたり、吸水スポンジを使用するときは、ややゆとりを持たせましょう。ピンクの中でも少し濃い色の富士をアレンジに入れるとアクセントになります。



サラ・ベルナール

名前の由来はフランスの大女優。淡いピンクで、花姿や香りが華やかな品種で、ブライダルでの人気が高いシャクヤクです。昭和47年にオランダから大量輸入して独占栽培し、中野市が日本一の産地になったきっかけとなる品種でもあります。



ルーズベルト

やや和風の面影があり、和の装いとも合うシャクヤクです。

淡いピンク色のグラデーションが美しく、つぼみはマカロンのように、ころっとかわいらしい印象の品種です。



ユニバスター

透き通るような白色のユニバスターは、シャクヤクの花言葉の一つである「つつましやか」のイメージ通りの品種です。

爽やかな甘い香りがより一層この花を引き立てます。



バンカーヒル

バラ咲きの赤い花は、濃い緑の葉に映えてグラマラスでインパクトある品種です。

太陽のような花色のため、元気やパワーを出して張り切ってもらいたい方に贈ってみてはいかがでしょうか。

「市の花」シャクヤク

昭和40年代から切り花用として市内で集団栽培されるようになったシャクヤク。

その花の上品さは、梅雨入り前の爽やかな中野市の初夏を飾るのにぴったりです。また、品種も多く個性豊かなことに加え、切り花生産量日本一であることから、中野市を象徴するのにふさわしい花といえます。

昭和59年、旧中野市市制施行30周年を記念し、シャクヤクが旧中野市の「市の花」に制定されました。これは、平成17年に発足した新中野市にも引き継がれています。



▲旧中野市市制施行30周年記念式典（昭和59年7月1日）で、「市の花・木・鳥」の制定を発表。中央に見えるのがシャクヤク。